

コロナ禍における大学生による非対面型地域子育て支援活動 —振り返りレポートの計量テキスト分析による検証—

川俣 美砂子, ミツ石 行宏, 玉瀬 友美
阿部 鉄太郎, 野角 孝一, 梶原 彰人
高知大学教育学部

Activities by non-face-to-face type for the child-rearing support by university
students under the spread of COVID-19:
Analysis of their reflective reports with using quantitative text analysis

KAWAMATA Misako, MITSUISHI Yukihiro, TAMASE Yumi,
ABE Tetsutaro, NOZUMI Koichi, KAJIWARA Akito
Kochi University Faculty of Education

要 約

本研究では、コロナ禍における非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」がどのような活動であったのか、その内容について記述し、また非対面型の「あそぼーや」を通して幼児教育コース1年生にどのような学びがあったのか、当該学生の振り返りレポートの計量テキスト分析を通して明らかにすることを目的とする。非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」の内容の記述と振り返りレポートの分析から、学生は、担当教員の指導のもと、協力する楽しさや難しさを感じながら、活動を進めて行ったことがわかった。その中で、子どもの発達の姿を予想しながら準備を行ったり、教材研究の大切さや、身近な素材を教材として利用できることを実感していたことから、本活動が学生の保育に関する実践的学びの機会となり得ていたことが明らかになった。地域子育て支援活動「あそぼーや」は、本活動の性質上、学生が子どもや保護者と直接対面することで学ぶことが大きいいため、対面での実施が望ましいが、準備等は必ず参集しなくとも非対面で行うことが可能であることも今回の経験でわかった。

キーワード：非対面型地域子育て支援活動、大学生、振り返りレポート

1. はじめに

1.1. 地域子育て支援活動「あそぼーや」のはじまり

わが国では、2004年に「子ども・子育て応援プラン」が策定され、子育て支援政策が推し進められている。このような全国的な子育て支援の流れを受けて、2004年以降には大学のキャンパス内に子育て支援拠点が設立される等、保育者養成課程をもつ大学等が子育て支援活動に取り組むようになってきた（矢萩 2013）。

本学においても、2015年4月に教育学部幼児教育コ

ースが開設され、同年5月に地域子育て支援活動「あそぼーや」の活動が始まった。「あそぼーや」は、幼児教育コースの学生が教育学部教員の指導のもとで、近隣に住む幼児と保護者を対象に、遊びを企画、実施する活動である。保育者養成校における子育て支援活動は、保育者を目指す学生にとって重要な学びの場でもあることから（梶浦・鍛冶・清水 2006、松原 2015）、本学の地域子育て支援活動「あそぼーや」においても、実践後には振り返りの時間をもち、振り返りレポートをもとにグループディスカッションを行い、全体で成果と課題を共

有し、次の計画につなぐ取り組みを行っている。

1.2. 新型コロナウイルス感染症予防対策下での本学の対応

2019 年末に中国の武漢市で確認された新型コロナウイルス感染症は、全世界へと広がり、日本においては、2020 年 4 月 7 日に緊急事態宣言が感染拡大警戒地域とされた埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県及び福岡県の 7 都道府県に発令された。そして、4 月 17 日には、感染拡大防止に努めるため、緊急事態措置を実施すべき区域は全都道府県に広げられた。

これに伴って、同日より高知大学でも、1 学期間の授業については、一部の実験・実習を除き、原則として対面では行わず、オンラインにより実施することとなった。（「新型コロナウイルス感染症拡大防止の緊急要請」高知大学危機対策本部 令和 2 年 4 月 17 日 参照）

1.3. 新型コロナウイルス感染症予防対策下での地域子育て支援活動の意義と目的

先述したように、地域子育て支援活動「あそぼーや」は、幼児教育コース学生が教育学部教員の指導のもとで、近隣に住む幼児と保護者を対象に、遊びを企画し実施する活動である。

しかし、新型コロナウイルス感染が終息しない状況下において、例年通りに対面で実施することは不可能であった。そこで、対外的遊びの機会が減少しているであろう、これまで地域子育て支援活動「あそぼーや」に参加した親子へ、遊びの提供を行うこととした。保育者をめざす学生にとって、非常時下の子育て支援活動の方法を計画し、実践し、振り返ることは重要な機会である。

本研究では、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」がどのような活動であったのか、その内容について記述し、また非対面型の「あそぼーや」を通して幼児教育コース 1 年生にどのような学びがあったのか、当該学生の振り返りレポートの計量テキスト分析を通して明らかにすることを目的とする。

期待される効果としては、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」実施後の学生によるリフレクションの内容と事後レポートを分析することによって、本活動が学生の保育に関する実践的学びの機会となり得ているかについて検討できるということである。

2. 方法

2.1. 非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」の内容と日程

非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」は制作遊び、リズム遊び、粘土遊び、版画遊びの全 4 回を実施した。非対面型「あそぼーや」の準備は「高知の保育を考える I」授業の中で行った。本授業は、本来ならば 1 年次 1 学期に開講される授業であったが、2020 年度 1 学期は、新型コロナウイルス感染症予防対策のため、学生は学内に入構できなかったため、オリエンテーション等オンラインで実施可能な内容のみを 4 月に行い、あとは 2 学期に、新型コロナウイルス感染症予防対策を行いながらの対面授業と、Teams を使用してのオンライン同期型授業、moodle を使用してのオンライン非同期型授業を併用して開講された。

非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」1 回の活動につき、「高知の保育を考える I」授業の 3 コマ分を割り当てた。

活動の内容は、学生が計画した非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」について、担当教員が自分の専門分野（美術、音楽、幼児教育）を活かして指導、助言し、実践する。非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」実施後は、学生によるリフレクションを

表1 2020年度 非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」活動日程

回	月日	内容
1	10月5日	制作遊び1
2	10月12日	制作遊び2
3	10月19日	制作遊び3
4	10月26日	リズム遊び1
5	10月30日	リズム遊び2
6	11月9日	リズム遊び3
7	11月16日	粘土遊び1
8	11月25日	粘土遊び2
9	11月30日	粘土遊び3
10	12月8日	版画遊び1
11	12月14日	版画遊び2
12	12月21日	版画遊び3

を行い、それにもとづいて振り返りレポートを作成する。活動日程は表 1 のとおりである。

2.2. 研究の方法

研究の方法としては、非対面型の地域子育て支援活動「あそぼーや」がどのような活動であったのか、その内容について記述し、学生の振り返りレポート内容をテキスト分析して、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」の成果と課題を実証的に検討することとした。

2.3. 分析の方法

振り返りレポートの分析には、計量テキスト分析システム KH Coder(Ver.3) を使用した。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整

理または分析し、内容分析 (content analysis) を行う方法である」とされている (樋口 2014)。

使用する振り返りレポートは、幼児教育コース 1 年生が、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」を実施して学んだこと、感じたこと、気づいたことについて 500 字程度の字数で自由に記述したものである。

分析の手順は、①振り返りレポートの記述内容をテキストデータに変換し、②単語頻度分析で単語の出現回数を分析して、③単語と単語の結びつきを探るために共起ネットワーク分析を行った。

2.4. 倫理的配慮

幼児教育コース 1 年生に対しては、振り返りレポートを研究に用いること、研究参加への拒否をしても何ら不利益は被らないこと等を口頭および書面で説明した。振り返りレポートを提出した 11 名の幼児教育コース 1 年生全員から書面で同意を得た。

また、「リズム遊び」活動による学生の動画の YouTube 配信に関しては、保護者と学生の署名による承諾書を取り交わした。非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」を体験した保護者からの感想等のメールについても、研究のために使用する旨、承諾を得た。

3. 結果と考察

次からは、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」として実施した、制作遊び、リズム遊び、粘土遊び、版画遊びの全 4 回の遊び活動について、その内容を述べ、実施後の学生の振り返りレポートを分析する。

活動は、(1)遊びの計画を立てる、(2)遊び (教材) の準備をする、(3)遊び (教材) を完成させるという順で実施された。遊びの計画については、家庭で遊ぶ子どもを想定して「あそぼーや計画書」を作成した。計画書の記入項目は、予想される子どもの姿、予想される環境構成、予想される保護者の援助、保育者 (学生) の事前の対応等で、各活動のリーダーの学生 3 名が中心となって記入した後、教員指導のもと、学生 11 名全員で内容を検討し、加筆修正を行って完成させた。

3.1. 非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」第 1 回制作遊び「色めがねを作って遊ぼう」

3.1.1. 「色めがねを作って遊ぼう」の活動内容

非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」1 回目の活動内容は、「制作遊び」である。

事前準備として、9 月初旬頃リーダーの学生 3 名より、ストロー笛、手作りパズル、マラカス作り、虹色めがね、色遊びめがね等、題材が提案された。

(1) 遊びの計画を立てる (10 月 5 日)

事前に提案されていた題材から、教員指導のもと、学生 11 名全員で話し合っ、虹色めがねと色遊びめがねを合わせた、「色めがねを作って遊ぼう」を実施することとなった。予め、リーダーの学生が下案を作成していたあそぼーや計画書について、学生全員で検討し、教員からの意見も加えて修正した。

(2) 遊び (教材) の準備をする (10 月 12 日)

学生は、実際に色めがねを作ってみながら、材料の素材や形、色、大きさや作り方を、幼児の発達状況を考えながら決めていった。また、色めがねを使用する

遊び方についても子ども
の姿を想定して考えた。

(3) 遊び (教材) を完成させる (10 月 19 日)

学生は、子ども・保護者への手紙と制作手順、色めがねの見本を作成し、四角いめがね、丸いめがね用の色画用紙、セロファン等の材料 (図 1) の準備等を行った。

第 1 回目の「色めがねを作って遊ぼう」の教材の郵送は、第 2 回の活動とまとめて行うこととした。

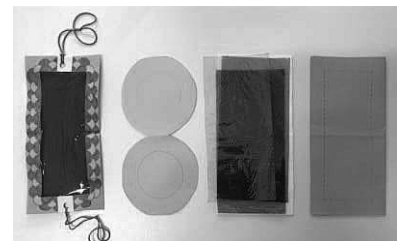


図 1 「色めがねを作って遊ぼう」の教材

3.1.2. 「色めがねを作って遊ぼう」の振り返りレポートの分析

非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」を経験することで、学生にどのような学びがあったのか、計量的分析手法を用いて、学生の振り返りレポートを分析していく。

(1) 「色めがねを作って遊ぼう」の振り返りレポートの頻出語

表2は、
「色めがね
を作って遊
ぼう」の振り
返りレポー
トについて、
出現回数が
5回以上の
頻出語を示
したもので
ある。出現回
数が多い順
に、「考える」、
「リーダー」、
「思う」、「活
動」、「作る」、
「子ども」等

表2 制作遊び振り返りレポートの頻出語リスト
(出現回数5回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
考える	34	色眼鏡	8
リーダー	31	全体	8
思う	30	グループ	7
活動	25	案	7
作る	25	意見	7
子ども	24	学生	7
作業	19	画用紙	6
時間	19	今回	6
計画	15	次回	6
協力	13	担当	6
教材	13	反省	6
見本	13	たくさん	5
授業	13	チーム	5
多い	13	材料	5
感じる	11	姿	5
自分	11	実際	5
役割	11	手順	5
楽しい	10	制作	5
準備	10	全員	5
作成	9	分かる	5
良い	9	分担	5
行う	8	遊ぶ	5

が見られる。「考える」(出現回数34回)については、「どのようなデザインにすれば子どもたちは喜んでくれるだろうと考えながら作るのはとても楽しかった」、「子どもの立場に立って、細かなところまで考えようと思った」「みんなで子どもたちの考えることや、動きを想像し」と、教材で遊ぶ子どもたちのことを考えたり、「3人で協力して考える時間も楽しかった」「(友達は)注意するところや説明が分かりやすいように書き方を工夫したり等、とても考えていた」、と、学生同士のことを考えている場合に用いられていることが多かった。「リーダー以外の人の働きかけが必要だったと考える」、「全員で役割分担をし、協力し合いたいと考える」と、分析的に思いめぐらすという「思う」に近い意味合いで「考える」の語を使用している場合も10回程度見られた^{注1)}。

「リーダー」(出現回数31回)は、「全体として、リーダーさんを中心としてみんなで協力できた」、「リーダー達はあらかじめ自分たちで見本を作成していた」とリーダーのイニシアティブを称賛する反面、「リーダー間でしっかり共有しておくことが必要だ」、「リーダーを務めるうえで反省した点は、みんなで作業をする際に予定通りにはいかず」等、リーダーシップがうまく働かなかったことについても述べられていた。「私がリーダーを担当するときの参考になった」と、次へ活かそうとするコメントも見られた。第1回目の活動ゆえの、協力体制の難しさを感じていたようだった。

本活動のテーマである「制作遊び」については、「作

る」(出現回数25回)で、「私の見本が子どもたちの手に届くと思うと制作中も楽しく作ることができた」、

「子どもたちの喜ぶ姿を想像して何かを作ったり準備することはとても楽しい」「画用紙1枚で何個めがねを作ることができるか」、「とてもいい物を作ることができた」等、子どもが喜ぶ姿を想像したり、作り方を工夫したり、満足感を味わったりしながら、楽しんで教材を作っていたようであった。

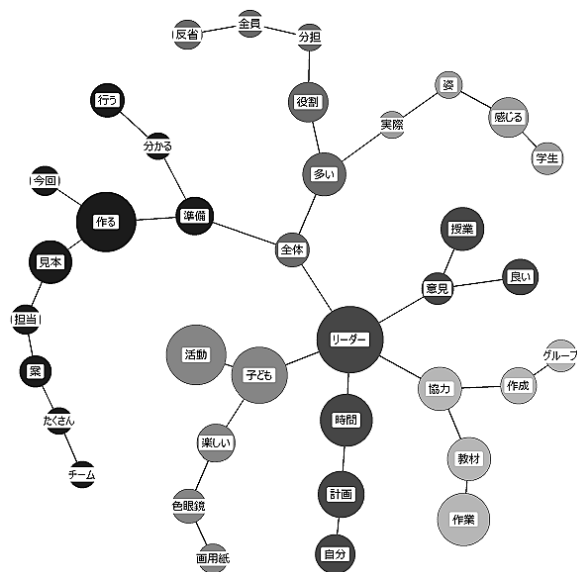


図2「色めがねを作って遊ぼう」の共起ネットワーク図

(2)「色めがねを作って遊ぼう」の振り返りレポートの共起ネットワーク

前項では、データに含まれる頻出語を確認したが、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」から学生が得た学びは質的にどのようなものであったか。ここでは、データの共起ネットワークによって語と語の結びつきを探り、記述の全体的な傾向を見ていく。本研究では、振り返りレポートの内容を分析することを目的としているため、語彙力の不足や論証の不十分さが原因で文末思考動詞として用いられることが多い「思う」と「考える」は除外して、共起ネットワーク図を作成した(注1参照、以下の活動時も同様)。

図2のように、「色めがねを作って遊ぼう」の振り返りレポートの共起ネットワーク図には、「リーダー」を中心に、「子ども」「活動」「楽しい」「時間」「計画」「自分」「協力」「教材」「作業」「良い」「意見」「授業」「多い」「役割」「分担」「全員」「反省」「今回」「作る」「準備」「全体」「分かる」「姿」「実際」「手順」「制作」「全員」「分かる」「分担」「遊ぶ」などの語が結びついている。

協力して教材を作成したことなどが文に表されていた。

第1回目の振り返りレポートの特徴としては、学生は、教材で遊ぶ子どものことを考えながらリーダーを中心に活動することを楽しいとも感じていたが、リーダーの役割が多く、リーダーからの指示待ちが多かったことも課題として挙げていた。学生全員で役割を分担して協力する必要性を実感していたと捉えられた。

3.2. 非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」第2回リズム遊び「きのこの星に行こう」

3.2.1. 「きのこの星に行こう」の活動内容

非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」2回目の活動内容は、「リズム遊び」である。

事前準備として9月中頃よりリーダーの学生と教員とが曲決めや流れの打ち合わせを行った。10月初旬頃に、きのこが苦手な子どもにも食べてほしいとの願いから、テーマを「きのこの星に行こう」として、「きのこの唄」を選択し、ピアノ練習等の準備を始めた。子どもたちが、歌やダンス等を通じて音楽を楽しむことができるよう、動画を撮影し、You Tube によってあそぼーや過去参加親子に限って視聴できる限定配信を行うこととなった。

(1) 遊びの計画を立てる (10月26日)

リーダーの学生が他の学生へ内容の説明を行った。ペープサートやきのこ等の制作、ペープサート劇の声、ダンスチーム等の役割分担を行い、その後、教員指導のもと、歌の練習を行った。



図3 きのこの被り物を制作中

(2) 遊び(教材)

の準備をする

(10月30日)

リーダーの学生を中心に作成した、きのこが嫌いな女兒が「きのこの星」に行くことで美味しく食べられるようになるというオリジナルストーリーを読み合わせ、ダンスの確認、歌の練習等実演に関するリハーサルを行った。

(3) 遊び(教材)を完成させる (11月9日)

動画の撮影を行った。まずペープサート部分、その後、歌やダンス等のシーンを撮影した。

なお、演奏楽曲「きのこの唄」、及び「ぼよん行進曲」に関しては、YouTube による限定配信について JASRAC と編曲楽譜の出版元に問い合わせ、楽譜が映り

込まなければ演奏してよいという確認をとった。

3.2.2. 「きのこの星に行こう」の振り返りレポートの分析

(1) 「きのこの星に行こう」の振り返りレポートの頻出語

表3は、「きのこの星に行こう」の振り返りレポートについて、出現回数が5回以上の頻出語を示したものである。出現回数が多い順に、「思う」、「活動」、「考える」、「リーダー」、「時間」、「撮影」等が見られる。「思う」(出現回数37回)については、「みんな楽しんで行っていたと思う」、「学生の協力体制としては、非常に良いものだったと思う」等、1回目の「あそぼーや」を経験後、2回目はどうであったかという学生の「思い」が、レポートに綴られていた。「個人的な反省として、ピアノの練習不足があっ

表3 リズム遊び振り返りレポートの頻出語リスト (出現回数5回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	37	作る	8
活動	34	声	8
考える	23	全体	8
リーダー	21	動画	8
時間	21	使う	7
撮影	19	必要	7
感じる	18	保育	7
協力	17	キノコ	6
子ども	16	見る	6
良い	16	事前	6
ダンス	15	自分	6
リズム	13	内容	6
歌	13	踊る	6
今回	13	スケジュール	5
作業	13	スムーズ	5
練習	13	学生	5
準備	12	空き	5
ペープサート	11	計画	5
作成	11	授業	5
遊び	11	制作	5
楽しむ	10	全員	5
行う	10	伝わる	5
楽しい	9	役割	5
工夫	8	—	—

できた活動があ

るのではないかと考えた」、「撮影時における困難をもっと具体的に考えておく必要があった」、「計画する段階でもう少し細かく考える必要があった」等が見られた。

本活動のテーマである「リズム遊び」に関わる語については、「ダンス」(出現回数15回)で、「空き時間を使ってたくさん歌やダンス、ペープサートの練習をした」、「私たちが考えたダンスを子どもたちが踊ってくれることを考えると、とても楽しい気分になる」、「歌やダンスの練習をしたりできたことも、みんなの協力があったからこそできたこと」、「ダンスや歌を間違って撮影が止まってしまったときに、『大丈夫、大丈夫』と声を掛け合うことのできる環境があるというのはとても幸せ」等が見られ、子どもたちのことを考えながら、自分たち

もダンスの練習を楽しみ、学生同士の協力体制やチームワークの良さを実感していることが、表れていた。

(2) 「きのこの星に行こう」の振り返りレポートの共起ネットワーク

図4のように、「きのこの星に行くこう」の振り返りレポートの共起ネットワーク図は、「子ども」、「活動」、「協力」が中心となって他語とつながっていた。「子ども」については、「子ども—動画—見る」、「子ども—時間」等である。「活動」については、「活動—リズム—遊び」、「活動—時間」等である。また、「協力」については、「協力—リーダー—良い—全体」や「協力—撮影—準備・練習」等である。振り返りレポートには、準備に時間がかかったが、子どもたちに動画を見て楽しんでもらいたいことや、リズム遊びの活動を通してリーダーだけに頼らず全体で行う協力体制や準備・練習の大切さが表されていた。

第2回目の振り返りレポートの特徴としては、1回目の活動「色めがねを作って遊ぼう」での共起ネットワーク図よりも「リーダー」の円が小さく、若干横の方に表されており、「全員一楽しむ・計画一工夫」のつながりも見られることから、リーダーだけに頼らずに全員で楽しみながら計画したり工夫したりしたことも捉えられた。

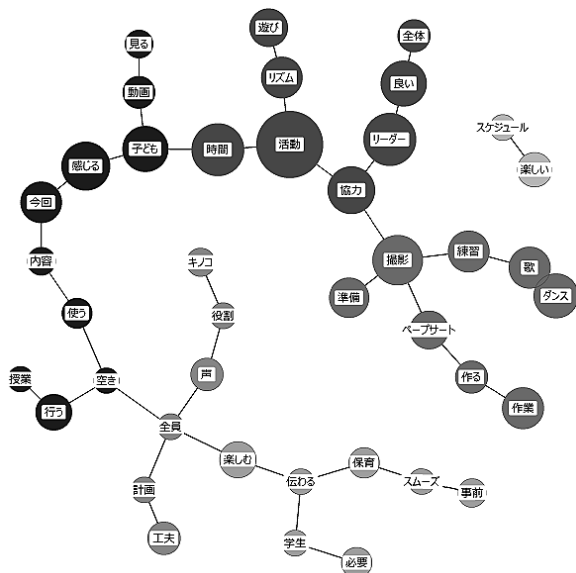


図4「きのこの星に行こう」の共起ネットワーク図

第1回目「色めがねを作って遊ぼう」と、第2回目「きのこの星に行こう」の教材準備が終わり、必要な材料に制作手順と子ども・保護者への手紙を付して、「あそぼーや」が開始された2017年から2019年まで

に「あそぼーや」に参加した子どものうち、2020年に就学前年齢であると予想される家庭に発送した（60通76人分）。

3.3. 非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」第3回粘土遊び「粘土でお弁当を作ろう」

3.3.1. 「粘土でお弁当を作ろう」の活動内容

非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」3 回目の活動内容は、「粘土遊び」である。

事前準備として、9月末までに粘土遊びの方向性についてリーダー3名で協議し、担当教員に相談するという事になった。第1案として、子ども達が自宅で粘土遊びをするための教材を映像で作成する、第2案として、学生が粘土で造形したものを物語風に編集し、読み物（観る物）として作成する、という提案が学生からあった。

(1) 遊びの計画を立てる (11月16日)

リーダーの第1案、第2案を踏まえて、全員で話し合い、今回は、「粘土でお弁当を作ろう」というテーマで、学生は、粘土で作ったおかずの見本の写真と制作手順の冊子を作成することになった。

(2) 遊び（教材）の準備をする（11月25日）

弁当の具材、弁当箱の形態、使用する粘土や絵の具の種類等、担当教員に相談しながら検討した。

(3) 遊び (教材)
を完成させる (11
月 30 日)

一つ一つの具
材を紙粘土で制
作り、その過程を
写真撮影して、幼
児と保護者が家
庭で作る際の参
考になるよう、制
作手順の冊子を
作成した（図5）。
また、弁当に入れ
るバランや小旗
も作成した。



図5「粘土でお弁当を作ろう」
の制作手順の抜粋

もとに計画書を作成した。学生全員がスチロール版画とスポンジ版画の実践を行い、改善点や制作についての意見交換を行った。

(2) 遊び(教材)の準備をする(12月14日)

活動の進捗状況の確認を行った後、制作の手順と、計画書の再検討を行う2チームに分かれて改善点を話し合った。制作

の手順については、画用紙の大きさの検討、使用する箱の



図7「版画で遊ぼう」制作手順に提示した版画の見本

選定、紐の付け方等の意見の擦り合わせを行い、計画書については基本的にそれらに準ずる形での修正を加えた。

(3) 遊び(教材)を完成させる(12月21日)

前回の課題として制作手順と計画書の修正を課していたため、その確認を全員で行った。主に学生同士の意見の擦り合わせを行い、制作手順および計画書を完成させた。最後に、郵送するスポンジスタンプの進捗状況を確認し、担当教員が切り出すスポンジの形の助言を行い、冬休み中に教材を完成させることを確認した。

第3回目「粘土でお弁当を作ろう」と、第4回目「版画で遊ぼう」の教材準備が終わり、必要な材料に制作手順と保護者・子どもへの手紙を付して、1回目の郵送時と同様に、2020年に就学前年齢であると予想される家庭に発送した(48通64人分:1回目の発送の際に住

所不明のため不達であった分を除いた)。

3.4.2. 「版画で遊ぼう」の振り返りレポートの分析

(1) 「版画で遊ぼう」の振り返りレポートの頻出

表5 版画遊び振り返りレポートの頻出語リスト(出現回数5回以上)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	36	掘る	9
作る	25	作業	9
活動	21	難しい	9
スポンジ	17	良い	9
版画	17	オンライン	8
トレー	16	対面	8
リーダー	16	計画	7
考える	16	時間	7
今回	16	人	7
スタンプ	15	先生	7
授業	15	行う	6
食品	14	試作	6
感じる	13	自分	6
形	13	実際	6
遊び	13	説明	6
使う	12	協力	5
子ども	11	見る	5
意見	10	想像	5
切る	10	反応	5

語

表5は、「版画で遊ぼう」の振り返りレポートについて、出現回数が5回以上の頻出語を示したものである。

出現回数が多い順に、「思う」、「作る」、「活動」、「スポンジ」、「版画」等がある。

作る(出現回数25回)については、「リーダーだけで全て決めてしまうのではなく、作成手順や計画書作成などをみんなに意見を聞きながら一緒に作ったので、全員が内容を同時に把握することができた」、「1時間目の授業で、どんなデザインなら作りやすいかとか、何を使って掘ったらきれいに掘れるか等を学生同士意見で出し合うなど協力してできていた」、「(急な変更で)試作品を作ったことがなかったのでどのように作ればよいか説明がなく困った」等、協力体制がよく取れてきているが、難しい部分もあったようである。版画(出現回数17回)については、「食品トレーやスポンジなど、身近な素材で手軽に版画のような遊びをするという発想が面白いと思った」、「トレー版画が思ったより掘りづらかったり、スポンジスタンプが切りづらかったりしたこと気付いた」等、身近な素材で遊びを楽しめることに気づいたり、前回の活動に引き続いて本活動でも、教材研究の大切さを感じていた。

(2) 「版画で遊ぼう」の振り返りレポートの共起ネットワーク

図8のように、「版画で遊ぼう」の振り返りレポートの共起ネットワーク図は、「遊び」、「授業」、「スポンジ」が中心となって他語とつながっていた。「遊び」については、「遊び—対面—行う—オンライン」等である。「授業」については、「授業—スポンジ—トレー」等である。

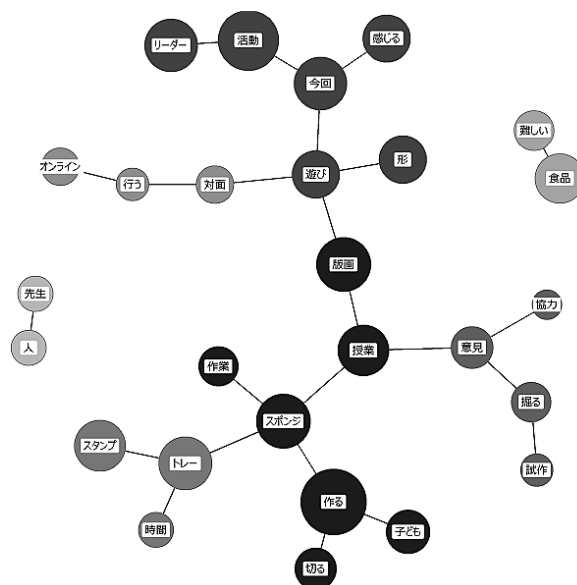


図8「版画で遊ぼう」の共起ネットワーク図

意見一協力」等である。「スポンジ」については、「スポンジトレースタンプ」、「スポンジ作るー子ども」等である。振り返りレポートには、遊びの準備を対面で行えないオンラインの難しさや、スポンジや食品トレーなどを使用したことによって身近な素材を使用できることに気づいたことなどが表されていた。

第4回目の振り返りレポートの特徴としては、中心にある「版画」からのつながりや、円の大きな「作る」、「活動」からも、身のまわりの素材に目を向けて遊びを作っていく楽しさや難しさを感じており、「日常のさまざまなものが工作に利用できるの、どんなものでも取っておこうと改めて思った」という感想も見られた。子どもの姿を想像しながら教材研究を行うことに加えて、工夫して子どもの身のまわりにもあるものを使用する大切さを実感していたことが捉えられた。

4. おわりに

本研究の目的は、非対面型の地域子育て支援活動「あそぼーや」がどのような活動であったのか、その内容について記述し、非対面型の「あそぼーや」を通して幼児教育コース1年生にどのような学びがあったのか、活動実施後に学生が記述した振り返りレポートの計量テキスト分析を通して明らかにすることであった。

振り返りレポートの分析によって、学生は、コロナ禍でオンライン同期・非同期授業と対面授業を併用して行うという複雑な環境の中、担当教員の指導のもと、協力する楽しさや難しさを感じながら、活動を進めて行ったことがわかった。その中で、授業等で学んだ子どもの発達の状況からその姿を予想しながら準備を行ったり、教材研究の大切さや、身のまわりにあるものが教材として利用できることを実感していたことから、本活動が学生の保育に関する実践的学びの機会となり得ていたと言えるであろう。また、対面授業が制限されたり、生活の様式にも変化がある中、本活動を実施することで、学生が人とコミュニケーションを取る機会ができたことも本活動の成果であろう。

また、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」を体験した保護者からは、「工作キットを見るなり『はい、制作するから順番に来て〜』と、母親相手に先生になりきって遊んでいました。材料をわかりやすく下準備してくださっていたので、子どもにも分かりやすかったようです」、「ふだん、子ども番組を見るときは受け身的なのですが、あの動画では、踊りも一緒にやっていました。あそぼーやの楽しい記憶があり、そこにいた大学生たち

の作った動画だということで、既製の子ども番組を見るのとは異なる体験だったのだと思います」「未就学児のための教材という観点からは、食品トレーとボールペンというのは、うまい選択だと思いました。発泡スチロールのトレーに水彩絵の具を載せるのに少しコツがいましたが、失敗しながらわいわいと楽しむというのも楽しいプロセスなのだろうと思います」等と、好意的な感想をいただき、学生や教員の励みとなった。

課題としては、非対面型地域子育て支援活動「あそぼーや」では、「あそぼーや」計画書については、例年のような細かい指導をする機会が少なかったこと、学生の振り返りレポートに「子育て支援」、「あそぼーや」、「保護者」の記述が少なく、それらを意識付けするまでに及ばなかったことが挙げられる。

森(2021)では、子育て支援室員と教員が運営する大学の子育て支援事業は、継続会員制であるという条件のもとであれば、遠隔子育て支援においても目的は達成できるとしていた。本学の地域子育て支援活動「あそぼーや」はどうであろうか。「あそぼーや」は、幼児教育コースの学生が教育学部教員の指導のもとで、近隣に住む幼児と保護者を対象に、遊びを企画、実施する活動であるため、やはり、子どもや保護者の生の声が聞こえ、動きが見られ、体温を感じることができる対面での実施が望まれる。しかし、非対面型の「あそぼーや」を経験したことで、準備や話し合いの一部はオンラインでも実施可能でもあったことがわかったため、今後は、対面非対面併用で行うことも可能であろう。

注

1. 川端(2013)によると、大学生のレポートには、語彙力の不足や論証の不十分さから、「思う」や「考える」を使用されることが多い。今回分析の対象とした振り返りレポートにおいても、「動きを想像して工夫ができたと思う」や「全員で役割分担をし、協力し合いたいと考える」等、「思う」や「考える」を用いなくても文意が伝わる文もあった。しかし、「私の見本が子どもたちの手に届くと思うと制作中も楽しく作ることができた」やリーダーの人たちが考えてくれた計画書をみて」等、文意を伝えるために必要な語である場合もあった。特に共起ネットワーク図でそれらを区別して分析することが難しかったため、本研究では、「思う」、「考える」は、抽出語としては出現回数をカウントしてその語の使われ方を分析し、共起ネットワーク図では、語と語の結びつきを探るようになるため、削除して分析した。

引用文献

- 梶浦真由美・鍛治紀美子・清水貴子(2006)、保育者養成における子育て支援に関する研究(1)―学生のレポート分析を通して―、北海道文教大学研究紀要、30, p. 45-54.
- 川端元子(2013)、大学生のレポートに出現する「思う」と「考える」の機能について：伝達の側面から見た問題点、愛知工業大学研究報告(48), p. 77-84.
- 樋口耕一(2014)、『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』、ナカニシヤ出版
- 松原敬子(2015)、子育て支援における学生の育ち、植草学園短期大学研究紀要、16, p. 31-37.
- 森美保子・鐘ヶ江淳一・阿部敬信・阪本啓二・田中沙織・森暢子・渡邊・由恵・沖本悠生(2021)、新型コロナウイルス感染症対策に伴う緊急事態宣言下における遠隔子育て支援の実践、九州産業大学人間科学, 3: p.

62-70

矢萩恭子(2013)、2歳児保育室「あそびば『ぽこあ』」における成果と課題―保育実践力養成と子育て支援の相互機能の側面から―、田園調布学園大学紀要, 8, p. 79-102.

付記

本研究の一部は、「コロナ禍における大学生による地域子育て支援活動―非対面型による実施―」(発表者：三ッ石行宏、玉瀬友美、川俣美砂子)として、日本保育学会第74回大会(オンライン開催)によって、発表されている。

郵送料、材料費等は、「令和2年度 学部長裁量経費」(高知大学教育学部)より支出されている。